

**JAPANESE EVANGELICAL
MISSIONARY SOCIETY**

948 East Second Street
Los Angeles, CA 90012-4317
Tel: 213.613.0022
E-Mail: info@jems.org
Web: www.jems.org



JEMS - 日本語部 支援 : NICHIGO-BU SUPPORT

☐ 日本語部とスタッフのためにお祈りいたします。

☐ 日本語部の働きのために 毎月 \$ _____ 捧げます。(_____ 月 _____ 年まで)

☐ 今回 \$ _____ 捧げます。

Name _____ Phone _____

Address _____ City _____ State _____ Zip _____

E-Mail _____

チェックのあて先はJEMSとお書き頂き、Memo欄にNichigoとご記入下さい。

JEMS P.O.BOX 86047 Los Angeles CA 90086-0047 電話: 213-613-0022

※オンライン献金 <https://jems.networkforgood.com/projects/10875-minako> もご利用頂けます。



時 報 一 ひとときの想い

西原 黎子

クリスマスに行われるキャンドルサービスは、4世紀半ばになされたキャンドル・ミサに起源するという説がある。暗闇の中でキャンドルの炎がゆらぐ様子を子供心に神秘的だと心奪われた記憶がある。キャンドルの光は、キリストがこの世に生を受け、人々を照らす光をもたらしてくださったことを象徴するとも言われている。キリストが苦しみ悩む人に、「今のままの、そのままのあなたでいいのだよ」と語りかけてくださっている。平安がそこに生まれる。PEACE on EARTH....



ヨハネ1:9 すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。

ヨハネが救い主を「人を照らすまことの光」と表現したのはイエスキリストこそが預言者イザヤの預言の成就だと伝え知らせるためでした。

イザヤ9:1 しかし、苦しみのあったところに闇がなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は辱めを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦の民のガリラヤは栄誉を受ける。イザヤ9:2 闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝く。

イスラエルの北部、ゼブルンの地とナフタリの地は「辺境の地」でした。政治的に不安定で、経済的にも困窮していたのですが、イスラエルの人々の関心の外に置かれていました。「闇の中を歩んでいた民」とは政治的な混乱、経済的な困窮、社会的な不義を指しているのではありません。人々の心を覆っていた闇とは、神に見捨てられたという絶望だったのです。

あるとき、弟子たちは生まれつき目の見えない人が物乞いをしているのを見て、「先生、この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか。」(ヨハネ9:2)とイエスに尋ねました。配慮の欠いた、不躰な質問のように聞こえますが、当時の人々は「生まれつき目が見えない」、すなわち、光を失ったのは神の裁きによると考えていたからです。その人の家族も同じような考えを抱いていたのでしょう。彼の心を深い闇が覆っていたのです。イエスは、「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。」(ヨハネ9:3)と告げられたのです。

バーバラ・ブラウン・ティラーは、「説明

暗闇を照らす光

ニューライフキリスト教会 豊田 信行師

のつかない苦しみ」をそのまま受けとめず、理にかなった説明を常に求める信仰のあり方を「フルソーラー・スピリチュアリティ」(真昼の霊性)と批判をこめて呼びました。

パウロは、神はご自身の真実さにおいて、「あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません」(1コリント10:13)と断言しました。この御言葉は試練のなかにいる人の心を希望の光で照らしてくれます。しかし、試練がいつまでも続くように感じられるとき、希望の光が厚い「疑いの雲」にさえぎられると、絶望という闇に心が覆われていきます。しかし、太陽の光が厚い雲にさえぎられても、太陽が消滅したわけではありません。神の希望の光も疑いの雲にさえぎられても望みの神の存在が失われたわけではありません。

十二時、闇が十字架につけられたイエスを覆いました。「十二時になったとき、闇が全地をおおい、午後三時まで続いた。」(マルコ15:33) 闇は時間の感覚を奪います。息を引き取られるまでの三時間が永遠の長さ感じたかもしれません。絶望という闇に心が覆われた詩篇の著者たちは、「主よ、いつまでですか」と叫びました。彼らの心にはかすかな望みがありました。午後三時、暗闇のなかからイエスの叫び声が響き渡りました。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」(わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか)(マタイ27:46)イエスが望みから完全に断たれた瞬間でした。

「すべての人を照らすそのまことの光」である救い主イエスが暗闇のなかで絶

望の叫びを上げられました。イエスの十字架の死は弟子たちの心に暗い影を落としました。彼らはイエスにつまづいたのです。イエスの叫びはすべての人の心にある暗闇を引き受けた絶望の叫びだったのです。イエスが叫んでくださったので、誰ひとりとして、「どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と絶望の淵を彷徨うようなことをしなくてすむのです。

信仰の父アブラハムは約束の子を待ち望みましたが、老いていく自分と妻のからだに深く落胆し、望みが絶たれていました。神はアブラハムを天幕の外に連れ出され、「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」(創世記15:5)と夜空を見上げるように命じられました。昼間、太陽の光が眩しくて星の輝きは見えません。しかし、闇のなかで星は輝きます。昼間には見えないものが夜、闇のなかで見えてくるのです。

ヨハネ1:5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。

救い主イエスは闇の中で輝く星のようです。「神に見捨てられた」と絶望する心を照らしてくださり、いかなる絶望もイエスの輝きを消し去ることはできないのです。クリスマスー救い主イエスはあなたの心を照らすために来られたのです。イエスに心の扉を開くとき、心に希望の光が灯されることでしょう。メリー・クリスマス、救い主イエスの誕生を心からお祝します。

日本に—自然に福音が語られる場所—を —MESHRASHとcafe C&Rの歩み—

JEMS協力宣教師 沢田 潤・真優



私と夫は共に日本のクリスチャンホームに生まれ育ち、幼い頃は両親と共に教会に通っていました。しかし中学生になる頃から、部活動や勉強、アルバイトなどに追われるようになり、気づけば約10年ほど教会生活から離れていました。日本ではクリスチャン人口が1%に満たず、教会に行かない限り、他のクリスチャンと出会う機会はほとんどありません。そのような環境の中で私たちは「もしクリスチャンホームで育たなかったら、教会に行っていたらどうか」「自分は何を信じているのか」と、自分の信仰について深く考えるようになりました。けれども、神様は教会から離れていた私たちをも見放すことなく、むしろ多くの気づきと備えの時を与えてくださいました。その期間があったからこそ、今の私たちの信仰生活がより豊かになり、福音を伝えるための器として整えられたのだと感じています。

2017年に結婚し、夫婦でどのように神様に仕えていけるかを祈り求めていたとき、「一人なら打ち負かされても、二人なら立ち向かえる。三つ撚り(みつより)の糸は簡単には切れない。」(伝道者の書4章12節)という御言葉が与えられました。それまでの私たちは、伝道とはトラクト配布や街頭での声かけのような直接的な活動だと考えていました。しかしこの御言葉を通して、まず大切なのは「神様と私たち夫婦の三つ撚りの関係」であることに気づかされました。私たち自身が神様を見上げて生きる姿こそが、自然と福音を語る力になるのではないかと、そう示されたのです。そして、「自分たちの生き方そのものを通

して、周囲の人々に自然な形で福音を伝えられる環境を作りたい」という思いが与えられ、ヘブル語で「三つ撚り」を意味するMESHRASH(メシュラーシュ)という名で、2018年にミニストリーを始めました。

当初は会社員として働きながら、アパレルやクリスチャンクリエイターを集めたイベントを企画する活動が中心でした。転機となったのは、MESHRASH主催のクリスマスマーケットです。教会ではなく一般のレンタルスペースを借り、3回ほど開催したのですが、毎回100名以上が来場し、商品に記された御言葉やクリスマスの意味を語り合う温かな空間が生まれました。私たちはそれを目の当たりにした時、「このような環境を一日だけでなく、日常の中に作り出したい」と強く願うようになり、そのためにカフェを開くというビジョンが与えられました。

そして2023年、多くの祈りと支えの中で、大阪府箕面市に『cafe C&R』をオープンしました。現在は週5日営業し、常連のお客様との関係づくりを大切にしながら、日曜の午後にはクリスチャン同士で礼拝と交わりの時間を持っています。カフェを拠点に地域に根ざしたクリスチャンコミュニティ(教会)を形成し、「GOOD NEWS IN A GOOD VIBE(良い雰囲気の中で福音が自然に語られる環境作り)」というMESHRASHの使命の実現を目指しています。

カフェという形には、お客様がサービスを受けるために代金を支払うという自然な関係性の中で、地域の人々に安心して受け入れられ、ノンクリスチャンの方々も気軽に来店できるという、伝統的な教会にはない

利点があります。実際、常連客が増える中で、聖書に興味を持ち始めた方に聖書を贈ったり、営業時間外に一緒に食事をしたり、常連客の中から日曜の集まりに参加する方が現れるなど、少しずつこの働きが地域に根付き、用いられ始めています。

一方で、カフェという形態ゆえに、外からはビジネスとして運営しているように見られ、ミニストリーとしての側面が伝わりにくいという課題もあります。私たちはこの働きを収益目的ではなく、100%神様のためのミニストリーとして行っています。カフェの売上や献金によって長期的に自立できるセルフサステナブルな(自力で持続可能な)ミニストリーを目指していますが、そこに至るまでには時間と多くの支えが必要です。現在、私たちは多くの方の祈りと経済的なサポートを必要としています。

どうかこの働きをミニストリーとして理解し、共に支えてくださる方々が与えられますように。そしてこの働きが今後も続き、教会に通わなくなった人も、信仰に触れたことのない人も、ふと立ち寄ったcafe C&Rで温かな空気と優しい言葉を通して神様の愛を感じられるような場所であり続けられますように祈っています。もし、祈りや献金をもって私たちを支えたいという心が与えられた方がいらっしゃれば、ぜひ私たちに力を貸していただけたら嬉しいです。



JEMS Websiteおよびサポート先:
<https://www.jems.org/give/jmsawada>
<https://youtu.be/9ZIEHhDings>

皆さん、日本は冬に入りました。お元気ですか？ 私はJEMSの協力宣教師として、神奈川県の中湘地域で牧会しています。海と山に囲まれたとても良いところです。日本では「あと何回さくらを見られるか？」という表現をすることがあります。人生を振り返る意味で言ったり、考えたりしますね！そこには寂しさや、人生の儚さを感じさせることもあるかもしれません。しかしクリスマスは違います。牧師家庭に育った私は、忙しさだけを思い出すこともあります。クリスマスこそ、イエスを受け入れる人々が、世界中で起こされてゆくこと！そして本当に日本人の心にイエス様への思いををを起こさせてほしいと願うのです。

結婚して30年、二人の息子が与えられました。妻のさかえと出会ったのはパイブルキャンプでした。また、私が仕えている上野にあるフリースクールのプログラムには、年間8回くらいの『合宿』（自分で作らないとご飯も出てこないような趣旨のキャンプ）を開催しています。伊豆の大島での『長期合宿』では、ゲーム依存や、昼夜逆転でリズムのない日々を過ごす生徒たちの生活訓練の場になっています。今までも、これからも合宿は大切なプログラムになっています。12年前にマウントハーモンに参加した息子たちは、日本からの参加でした。全く言葉の通じない社会を体験しました。その時の一週間が彼らの信仰や生きる目的の指針となっていることを思います。通常一年をかけて共同生活を築いていく過程をわずか2泊3日くらいで得られる体験のインパクトは大きいのです。イエスは3年以上弟子たちと生活を共にしました。マウントハーモン・キャンプ、宣教師の方々のリトリートではこどものプログラムを組みます。これは単なるキッズケアではなく、礼拝と一緒に体験したいという思いをを起こさせ、それ以上に私たち自身が子供のように、父なる神を体験させていただけるのです。

私たちの紹介写真にはJUMPという名

主を歌い、主に仕える

JEMS協力宣教師 木村 基一



前の犬と一緒に写っています。子供たちとかかわるミニストリーを始めたきっかけがなんであったかは分からないのですが、私と犬の関係に起因があるのかもしれませんが、私がまだ、6歳くらいの時、学校帰りに迷い犬がつかけてきました。白と黒のプッチーニに見事なまでに不細工な顔の犬だったのですが、友達と一緒に我々が家（教会に住んでいました）で飼い始めました。その後も一匹死ぬと、また一匹と、常に犬がいつもいる生活でした。ちゃんと数えたことはありませんが、すぐに飼い主を見つけた犬も合わせると30匹を超えていると思います。僕は喘息を患っていたので、まともに小学校や中学に行けた記憶がありません。当時は義務教育という名のもとで学校に行かないといけなかったと言われ続け、私はもう落ちこぼれも落ちこぼれ、先生には将来ホームレスになると告げられ、母は、随分苦労したと思います。自分自身いつもどこに居場所があるのかわからないと思って生きてきたようでした。だから、捨てられた犬や落ちていた一円玉を見ると拾わずにはられないのです。やがてそんな私に学校に行かない子供たちと

の出会いが与えられました。すべての子供を引き受けてきたわけではありませんが、見て見ぬふりをすることはできなかったのです。

私を拾って、全力で私のために生きたイエス、その十字架を見た私ができるささやかな働きなのです。妻のさかえも息子たちもいつも犠牲をはらって協力してくれています。そして、素晴らしいスタッフと仲間たちがいます。その中にはJEMSの宣教師たちもいます。こんなに幸せな人間はいないと思って、これからも主を歌い、主に仕えたいと思うのです。因みに、JEMSとの出会いは、震災のために活動していたクリスチャンのミュージシャンによるCDを制作のためにアメリカの日系人教会に義援金をお願いして訪問させていただいた時、JEMS総主事のリックさんに出会いました。

音楽と一緒に日本で活動してくれる方のため、子供の働きのために参加してくれる方のため、これからの日本のために、新しいあるいは、マウント・ハーモンから飛び火するようなリトリートを立ち上げたいと願っています。ぜひ祈ってまた参加してください。

JEMS Websiteおよびサポート先：
<https://www.jems.org/give/moto-kimura>

JEMS 日語部

JEMS日語部コーディネーター 藤本 三奈子

第77回JEMSマウントハーモン修養会 2026年6月28日(日)～7月4日(土)

マウントハーモンカンファレンスセンター: 37 Conference Dr. Felton, CA 95018

日語部講師: 豊田信行牧師(ニューライフキリスト教会) NPO a cup of water 理事長、

モリユリ・ミュージック・ミニストリー理事、 関西牧会塾ディレクター、 大阪聖書学院非常勤講師。

2026年1月13日(火)より申込み受付開始予定

JEMSウェブサイト: <https://www.jems.org/mh-main-camp>

皆様のご参加をお待ちしております。問い合わせ: minakoF@JEMS.org

